

# 歴史とまつりの魅力あるまち 羽島市 HASHIMA CITY ILLUSTRATED MAP

## 句碑、歌碑マップ

①太田巴静  
美濃国竹ヶ鼻光照寺に  
遊ぶに本郷川の帆かけ舟  
間近く見渡し侍れば  
涼風の  
他力や目にも  
帆かけ舟  
A 竹鼻町  
羽島市  
歴史民俗  
資料館

②山口誓子  
げんげ田の広大  
これが美濃国  
誓子  
B 福寿町  
極法寺

③白木南栖  
白牡丹夜は出て  
あそぶ仏たち  
C 福寿町  
千代田  
公園

④  
回想風雲天正年  
竹城一夜恨綿々  
遺芳烈婦魂安在  
三七松辺哭杜鵑  
即真居士  
D 下中町  
三七松

⑤一味庵石田  
名木三七松を偲ふ  
おとのみ噺ぶや  
松の落葉風  
獅子門十九世 一味庵  
三七松 下中町

I 乗寺  
H 外栗野

A 羽島市歴史民俗資料館

B 極法寺  
C 千代田公園

D 三七松

⑥民部郷為家  
今よりや石田の里の  
秋かぜも  
夜寒にふけば  
衣うつらん  
民部郷為家  
E 下中町  
願照寺

⑦松尾芭蕉  
物いへば唇さむし  
秋の風 はせを  
筆塚 願照寺 下中町

⑧盤古庵松柏  
雨晴れて月あり  
のきに虫のこゑ  
盤古庵  
筆塚 願照寺 下中町

⑨翠竹園双雀  
佐しさを松に  
弾せて苦あらみ  
翠竹園  
筆塚 願照寺 下中町

⑩一味庵石田  
白雲の空行く果てや  
花紅葉 一味庵  
筆塚 願照寺 下中町

⑪松尾芭蕉  
市人にいで是うらん  
雪の笠 はせを  
F 江吉良町  
水除神社

⑫松尾芭蕉  
をりをりに伊吹を  
みてや冬ごもり  
はせを  
G 竹鼻町  
正法寺

⑬好々園迂言  
月花は死ぬ修業にて  
ありにけり  
好々園  
H 小栗野  
墓地

⑭橋杭地蔵  
朽残る真砂の  
下の橋はしら  
また道かへる  
人わたすなり  
空海  
I 小栗野  
一乗寺

⑮好々園迂言  
川水は時に濁れと  
梅白し  
好々園  
J 足近町  
大恵寺

⑯横井祥祐  
五十年を  
一日の如く  
詣できて  
みたまのふゆを  
うくるかしこさ 祥祐  
K 竹鼻町  
八劔神社

⑰渡辺俊明  
田家煙  
新はりの磯の  
田つらも人すみて  
塩がまならぬ  
煙たつなり  
竹鼻町  
八劔神社



## 各務支考と羽島の俳匠たち

### かがみしこう 各務支考

寛文五年（一六六五）  
享保十六年（一七三二）

美濃国山県郡北野村西山に生まれる。別号は、野盤子、見龍、東華坊、西華坊、獅子老人など。九歳の頃、大智寺の雛僧となるが、十九歳で下山する。元禄三年、近江にて芭蕉の門人となる。芭蕉に追隨し、卒去の際も終始看病奉仕した。その後、北陸、中国、四国、九州などを巡歴し、蕉風俳諧を普及させる。後、郷里に帰り、教を垂れる。獅子門の始祖と称される。

### おおたはじょう 太田巴静

延宝六年（一六七八）  
延享元年（一七四四）

美濃国竹ヶ鼻に太田可政の次男として生まれる。父可政は北村季吟の門人であり、兄の夕湖も俳諧に親しんだ。元禄十四年、支考を竹ヶ鼻に迎え、坂倉水石が願主となつて、八剱神社に奉納した十二吟歌仙に一座する。竹ヶ鼻を軸として、大垣の木因門、名古屋の露川門との交流が伺われる。正徳二年、名古屋にて剃髪し庵を結んで立机する。門弟に横井也有、河村秀根、如是庵理然等がいる。墓は、名古屋大須真福寺境内に建てられている。

### こうこうえんうげん 好々園迂言

天保五年（一八三四）  
明治三十七年（一九〇四）

羽島郡小熊村の人。通称新之丞、また好々園、縮遠廬、剃髪して迂言坊と号す。明治三十七年夏道統を継承したが、いまだ立机式も開かぬまま九月八日に没した。水が溢れ渇水に苦しんでいた郷土のために用水路建設に尽力し、肥沃な農地をもたらした。美濃派俳諧をリードし、指導的立場にあった。肺結核症に罹り、隔離生活を余儀なくさせられた。その時の歌集「加護能登理」が死後発刊された。

### いちみあんせきでん 一味庵石田

慶応三年（一八六七）  
昭和十四年（一九三九）

羽島郡下中島村石田の人。通称友三郎。号は石田、蛭堂、養老仙、慶哉、飛華落葉楼。鉄道庁に就職。大正九年四月道統継承、翌十年四月立机式を行う。北海道から奥羽、関東、北陸、山陰、山陽、四国、九州に至る広い地域に足跡を印し、朝鮮にも門人がいて、分社は全国で百二十四社に及んだという。書画、篆刻、弓道、舞踊等にも長けていた。

### ばんこあんしょうはく 盤古庵松柏

明治二十八年（一八九五）  
昭和四十九年（一九七四）

羽島郡下中島村石田の人。本名修一、松柏と号す。大正十三年、下中島水音分社の第二世分社長に就任する。昭和三十一年、獅子門の補佐職に就任した。昭和三十六年道統継承、四月三十日遷座式、十月八日立机式を行う。高味石田の高弟であり、俳諧『水音笈』の続刊に尽力し、俳誌『獅子門』を創刊した。



獅子門合同句集『百小竹』参照  
野田千平著『太田巴静と美濃竹ヶ鼻の俳諧』参照